茶道秘書 喫茶活法 下

伊地知文庫
文庫20
428
3

安地知氏書翰

百十八 臺子時水罷取入作法

茶立候て臺子の上へ水罷下へ置て臺盃を置
取て罷と持て立て居て仲のうへ一條

百十九 臺子時水罷所望時分

水罷を請て持て出て臺盃を置て茶立申候
出て手洗て臺盃を置て水罷の蓋をはずして出て
行て水を罷へ入て用いて立て出て待て居て
うへ仲へ水罷を上る

百二十 臺子時臺置所望時分

水罷と臺子の上へ臺盃を下へ置て水を付て不申
すると思別臺盃置申不申中に水罷と臺子の上へ付いたし
臺盃を置て水罷を上へ取臺盃を置て置不申上る

百二十一 茶立仕廻千棚上置茶入臺天目見時分

茶碗を手にとるとき二度目の炭仕足薄茶の点て終る
へ亭主へ入る時一人宛上ゆる行くゑうと時い茶し点て
ゑうと茶を点てこの間の炭出ると出いれ指
と柄杓置所の指へ入り水ゆる注ぐ時一人宛行てゑへ

百二十二 無茶釜置時茶釜置所之事

四畳半大目指の時い釜置所ゑうふちのまとに出柄杓
とを置たる柄杓の柄ゑと釜に一度大目と
仕舞ゑの時いる数のゑと柄杓釜へ

百二十三 客中立作法

脇点菓子もみくゑう一人宛を出ゑとゑ手和傳
ゑ脇ゑいりゆ主人やゆ活ゑ柄杓ゑ出ゆ点て出ゆ
濃ゑ武い茶ゆ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ

百二十四 帛物之事 前い白帛ゆ今ゆ茶ゆ茶ゆ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ

長さ一尺ゑ幅後立て九寸ゑ六分ゑ折て六分ゑ長ゑ折ゑ二方と後ゑ一方いるゑに出ゆ後ゑ

百二十五 柄杓立て火筋指添置事

炭置時ゑ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ

百二十六 中央卓茶湯事

四畳半の座ゑ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ
上ゆ柄杓ゆ切ゆ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ
ゑ指の出ゑ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ点ゆ出ゆ

百二十七 真表補繪之事

志川めを一文字ないなりそを伊表をし

百二十八 幢補繪之事

志川めをしをしをしをしをり

百二十九 輪補繪之事 附一條

紙のやうくりをしをしをしをしをり

一をを文字をの支太をを中へをを中へをを中へをを云一文字

風帋一文字の切をを風帋を云中風帋中の切をを云

百三十 表補繪名所

百三十一 板 風帋 畳 大紙 中紙 紙の名をを細へり

有是を志川めをしを 是板に表紙行太云

出地 桂地 淋地 裏の方よりはたをけをを

百三十一 掛物卷緒之留様

たの手にはをくたのをにて出をやをの方へ行をををくいた

結び中をを遠へたを結のをくを留ををを中をを留ををををを方へ

行ををををををくいた結をり

百三十二 掛物人前而卷様

下をを一文字の手はををををををくをの結をを行をを床のあを

手の上をを手を用をを結をいを亜ををくを

百三十三 掛物懸様

床のあを手ををを手の用を結をいて一文字のをを上を紙を

ををいくを付床をを付ををの方を紙を上を踏上をををを

結を付ををの方を後を踏ををををををり

百三十四 三掛之作法

三つをのを掛をを作をを作をを志をいあをて志

壹物雲付中とうりてをゆの仕入方へさを通し子細い
ふ壹ゆしすすの至ふをとうりけいかりゆしをゆのこりう
を結し対して無名抜こすれのをふのうけいたれ壹
なしたゆのを結いうりきぬう紙し

百三十五 掛物外題所望時干床飾様

之而をする時ふい菓子を喰へ出紙しを方に干紙時ふ
ゆうは中之の円和紙を五ふ方山縁りゆりを易一七而を
まるこ高うを床ふ師紙床ゆちのさを如を之のうゆ三ゆ円
う有うを角中円ゆして床の地紙ふ縁し子床のうふよう
ゆをを中ふ地紙のゆうふの張ふうへ通こ印ひのうう
きをうう之の円かをつこ丸へへうゆ時いゆの紙ふ入ゆ紙
を之のいゆこ入ひて二を之床ふ也と出ゆ時いふ縁こへ

結ふに壹而をの時結ふとうれ出一を之のいゆこふをを
て出ふゆゆうを時い刈結ゆ入ふうう

百三十六 外題干床飾置時客所望事

退出の刈一和をするうゆの床こみふうを如て初ゆに
和紙を縁うゆ有を時い菓子を喰へ中之ゆる時而をゆる
うゆ之床ゆ壹付高うを初縁通ふる之の円と紙之て
を円物ふ床のを中ふ壹物こ又結ふふ高うを出ゆ時出一
ゆう而ふ五をうう

百三十七 繪讃物見様

之ん結を見へ様渓とうふこ左ゆ牧渓の結ゆを渓をて
ハ結結ゆうこ子細い牧渓を結ゆ上ゆをゆゆ之渓とをを也ま
今へ結ふかうしや

百三十八 干床掛物與花入置合時見様

[illegible]

百三十九 軸本軸末之事

上元床に上元を地本とし下元の方を地末とも地根
ともに下元床に下元の方を地根或地末とも上元の方を
地本とすし

百四十 依左繪右繪床構相違事

右繪のをあはせるに上元床を梅たるに他し左繪あるに
人々下元床を梅たるに他し但名あのをあはせるに人のこと
[illegible]

百四十一 道具記見様

[illegible]

百四十二 石立作法

[illegible]

百四十三 箭筈薄板表裏事

[illegible]

百四十四 薄板置様

[illegible]

底ゆのまんのようナ七日こ但底の大小ゑ人の大小よりこ
ゑの日ゆ多花ゑて中日よ雪ゆ多
百四十五 于薄板花入置様
ゑ中よ雪ゆこ花ゑ雪ゆ日ゆ
百四十六 古銅花入畢而有紋持様
ゑ入ゑ多ゑをゆとゆこ紋の中くゆの垢ゆ多て無ゑゆこゑ
入ゑ付いれと入ゑ紋の中に雪ゆ
百四十七 青磁花入事
花入ゑ付ゆ水ゆ多ゆこゑ紋の文様ゆよゑ多いゑ磁の上成皆
ゆ多こ
百四十八 籃（カゴ）花入事
ゑ水ゆ多ゆこゑゆ入ゑ花ゑ多こ万一下に雪ゑ多ゑ有ゑ時ゆ底

百四十九 浮壺便花入事

下にもと生垂をかけ水を出す

百五十 釣舟之事

古代より床の天井板に方丈を懸
申候しかの如く二重に仕候
をもとしかの如く二重に仕候
二条有之別にもとしかの如く

百五十一 竹筒二重切花入 附一重切事

如別二重切と云二重切は宗易切たるなり二重切
しかも所をもるなり上に中入の物二重切はもるなり

百五十二 床柱に花入掛事

を物と是を入る花生を掛る床

の上面より至ればしより面へくちし至くれば上を至らず無
なくし汀ばかりの所ばかりのようにて三尺ばかり汀をかけるべし

百五十三 四方花入事

九寸高さより長きものは大夢板より下載ばかり

百五十四 客人に花所望作法

中立の間花入を夢板より載ばかり上に所のくしに下
花所にて花のうの方花入の色所の上より本見の是ばかり花
を無にて中ばかりさめてもかかるべ但もと高麗ばかりする
よ無ものしい

百五十五 花生様之事

高もとなくの時置きくし後所よりもいもせるこ久安より乃
れてこ若紙所ばかりもよくせてきるる

一元の見ばかれ様ばかり紙ばかりもこ中様くもこ見ばかり入
年よりかくらくるばかりくいるてするこ但本々のうち
高もの方へもくくこさねばこ所に至時ばかり所ばかの方
へうしめるくくばかりるもの

百五十六 自主人花入致拝領申請披作法

夢板よりのもて沙花ばかり佛ばこ中立の時も但出ばかりこ
せさもやのもせにこいうの辞退ばかり

百五十七 于床與花入墨跡與置合方與不置合子細

宗易答ばかりをばこをにもこせ中立ばかりこ佛ばこ
宗易答の道ば中立の間ばかりをこ入ばかりこ至ばこ夫を
宗易一服所申ばかれもばかりこ佛ばこ
こて沙花ばかりを為中立の時ばかり而於為客ばこん
ばかりす

百五十八 繪掛竹釘折様

二寸四方より面を九寸四角すべし八角宇ゟ切れより割こまん形より切り
切張付の方とお仰く前竹の皮は用ひれ共ともに父を付き
九分天井の上をうし九分下に折し但皮の方を表たの方
にうく折こい用くる折折き切れたりこと但之をの
折折おい中の折は用を上にうく折也しあ方の折乃皮は用いる
方の張の方へして折物し中の折ようゟ中程まうく折し

百五十九 眞張付繪掛之折釘折様

大しのきをおいたゟ一の下を大きに絶上折ふ折し但三寸折付

百六十 花入掛之折釘折様

底の五寸のいと大張の下より也あ形乃上をゟ三尺し但五寸
はゟ上て元長い三尺四寸にて折し

百六十一 茶入袋釘之釘折様

たゟ上をの上をゟ二寸六分に折し柱の円ゟ先角に折也

百六十二 箒掛之釘折様

高流の円五分の方四寸に藁穴を塩ゟ上に六寸大
竹折を折し折物是竹を切を分し箒を下に沈合箒
先を之寸ほど四方に折を折し穴塩ゟ円ゟ塩竹を一個
たくすり

百六十三 葉茶壺名所

口の心ゟ下口の号大角を　浦くろめと云　唐ゟ渡
京有を心の渡京と下京ゟ有渡京をすれ也
致京と号也口と下西有口伝して陸しを口を定ゟ
ゟ茶入茶碗十口を下ゟ

百六十四 葉茶壺裝束事

口覆 口緒 長尾 乳縄 網 網に付たる緒を長緒と云也

百六十五 茄子茶入 附 客亭主會釈事

茄子の茶入を盆にのせ茶立る時は盆合せ常別ならし 茶立る時茶碗出して茶碗と膝との間に盆袋ながら出して袋を下に置盆を前におき扱茶入を右に袋より取出して先袋を下に盆茶入を右に扱帛紗取出し拭ひて帛紗にて拭ひ茶入を左の手に取て盆の中に置き扱袋を右へ寄え茶杓をとり右の方に茶入を盆に取り置き仕舞時は茶入を右の手に取て右の手に持ち帛紗取出し右の手に移し盆を盆すこし向へ押出し帛紗にて拭茶入を右の手帛紗にて拭茶入を右の手に取て客へ出す也 扱客は

亭主も右茄子を今扱ふとまる時は茶入を右に取て右に付盆にのせ出しまた茶入を盆すこし上座の方へよせ茶入の表盆の表紙を盆より扱膝の前へ取右へ少し引寄せ右の手盆を直し茶入をのせ盆を取り扱茶入を右の手に持ち左の手に別扱茶入の蓋は帛紗の上に置き右にて扱ひ次の客へ渡す時は帛紗にて盆をつ帛紗のうへにそへて次の客にて取り扱盆の表を見る也 又帛紗に付て扱ふ

百六十六 肩衝之事 盛は捻を二方より持つ時は一方よりもって扱とかたり

茄子の壺子の時茄子の茶入にて濃茶立て後茶は肩衝也 立る也 其別茄子の茶入は王位に比し肩衝は将軍の位なり 茄子の壺子の時茄子の茶入にて濃茶立て後茶は必ず肩衝を立る

百六十七 大海円海事

茶を取付たの袋物を肩へをてわたしやに寄る時蓋の上より
茶枚をわくに置物事中仕の上より置物を置仕なるべし
たの組みたくすう

百六十八 水滴事

蓋合付口をもふくしてをなにして蓋を出し袋を出し第五の附
口と共分ふくしてきるの方を第五の分ふくし第五の第枚をきる
よりをけて置物しあるに付出し如何なる品の方を
いろうの方へもろくを出しし

百六十九 手爐事 壺同 ようすかたあし
蓋合をなをいの出し水滴より

百七十 常陸帯事 附茶器名 有御ふてうよ有多

一 文茄 通子
一 薬器 用
一 頭切
一 栗 九壺同
一 中續 肩衝同
一 鶏頭 通肩
一 飯銅 通
一 扈膨良 用
一 柿 通
一 雪吹 面取名茶器也 通肩
一 文琳
一 餌簧 先
一 瓶子 用
一 樽形 通
一 瓢箪 通
一 臨器 九帳表
一 九壺 底ニ指二分持
一 驢蹄 衝次
一 枡子 通
一 勢至 用
一 瑠茶 反蓋 唐物茶入無盆時
一 ツウセカミ 上子
一 老茄 下子

百七十一 湯桶事

水滴を釜口なるこ但茶碗に別茶こし茶碗時とあの方をとる
て下より茶碗しるしの茶をとりて湯桶より茶をもて
上より茶をとりてしるしの茶をとりて湯桶なるや

百七十二 客人に炭所望作法

炭の炭乃時客人言伝或は茶道切をとりて亦をもる
なりを付に是非に炭を但炭かくるの方をもてて
炭の炭半無所なよ亦下にもるこ茶碗て亦と云
時たて答上下とこ亦言や茶碗答上大日梅乃炭
炭入る本奥を乃て亦の茶中に指亦所をめ
を但炭の方にて出一遠ぬこ四亦本梅の中炭すい
炭を沈ぬ〳〵亦たる亦るこ作亦て遠こ作本の戸を

以亦言こ〳〵入亦下大を出一中付亦やを上こ亦こ亦
て〳〵亦て〳〵茶碗を作の〳〵亦乃湯出こ沈こ沈乃
亦言こ中茶の次〳〵て下乃の亦乃次〳〵行て炭亦を
乃亦こ又作に亦こ作乃亦炭炭亦茶答を乃こ亦
時亦言を乃こ亦乃答を〳〵亦を〳〵亦こ亦
炭を沈ふて〳〵亦一茶沈こ亦答を〳〵亦
百七十三 嫌諸道具出間事
〳〵の但炭の方〳〵乃を〳〵亦乃亦
百七十四 四畳半座敷不通間事
是〳〵の但炭を沈乃亦
百七十五 依道具露ト云所事
を沈の但茶の〳〵亦〳〵沈〳〵を乃亦こ亦入の茶流を茶云

茶入の蓋入れくのことをかくしてあるべし

百七十六 茶湯道具之外千床飾様

公方の御指留天八何も御紙袋に入れ他紙に袋式造

床にもの方かくし帰却し

百七十七 眞茶湯 蓋をのるこ七ツ後二ツ後二ツ但七ツ但有

茶筌入有蓋天目にてをとりあし

百七十八 行茶湯 半板に方板し有

仕さの蓋天目に亀をとりあるべし

百七十九 草茶湯

常式の茶湯すべし

百八十 茶壺千床荘様

袋中にて修し床の左右に高中に長目二目ゟ三目

壺ゟ目紙に入れて修壺記有付いをるべし中時八を西へ

百八十一 葉茶壺所望而見様

とゝ席に茶子出時而申するし接拔して後に入茶子喰

上時出て茶子に壺を指をへ入れ壺をとるべし

小肥よりを出しゟ時に壺小肥に壺出りしゟ出ましゟ壺

の如ゟ紙を床に置へ行細しなりやされ紙をもの如にくれ

壺の底よりのを床を張て長て長大あゝゟと行逆て長ゟん

内ゟにくゝ立帰壺を下に逆袋をとり内し壺のゟと上

ゟの方へして出ましゟ袋中而ゟの時壺ゟ方へ壺と

ゟへ細を二ツよりて内を回して逆ゟ上口蓋を逆

又半紙をゟへゟ壺の内月ゟし式付を書紙をいへ内ゟ

わへゟ細出しゟ而へ出しゟ口蓋逆し半紙の内い

乱飾有台子にも仕舞ハ右の如く也但上客ハ右茶入ニ一礼して
台の前へ出て茶入の袋を客ニ見セてよく拝見ハ客の
右の手と茶入の蓋を左の手と左ニ居へ持ちかへ
膝の前ニて見る也但茶入の袋ハ右の膝の前ニ置
する様ニても見る也客の方へ向キ茶入を拝見しハ客ハ
て以の方へ廻し扨口覆をとりて以へ廻し茶杓をお
てうしる茶杓を仕組まれしも扨茶入の前ニて
茶入をおくへ廻し以の方へ向キ客の前へ置
茶入の茶入ハ左ニ置て茶入を上客へ出し夫より客
以の方へ向て上客へ茶入をとりて茶入を拝見する時ハ
客方より亭主の前の茶入の袋を客へ出して置茶杓
ハ亭主の前ニ茶入を出し置也亭主一礼して席へ帰ル

不審するの亭主茶杓をとりて茶杓を以て上客へ出し時ハ
かして出し上客上客ハ亭主の前に茶入を出しハ上客と
よれくとよし初亭主ハ拝見するを次客へ持て客へ渡し扨上
客茶入上座へ出して時亭主出し客へ一礼して以の方へ渡し時ハ夫
亭主ハ客へ出して亭主茶入をとりて時ハ上客ハ大切ニ扱ひ拝見
亭主拝見の茶入をとりて扨亭主茶入をとりて流して以の方へ一礼
有以の方よりも以の方へ向き以て次客ニ持かへ出し置て
客ハ茶入をとりて以の方へ出して茶入をもちて扨茶入を客へ持上る也
不審せし上ハ時ハ茶入の袋を亭主の前へ出して亭主ハ右
御不審へ出し茶杓ハ亭主ニ出しるの時の如く出して亭主の左ニ
亭主客へ亭主ニ出し茶杓や扨亭主ハ茶入を客ニ出し時ハ一
客席へ不審亭主以て略仕候と云時ハ直ニ持出して但書様の

時い亨と壺と所々ちがしと付壺の蓋方と蓋のにれ
立帰りこと和仕方はなしなし

百八十二 葉茶壺口覆掛様

口覆の仕方と壺の口の方よりよりくに覆二重巻て
おくれるよりもすくし但るの方とこれたの方にめ仕結
方乳俵口覆の下壺の口覆の上を和に結
て掛し但仕方と一つを壺の口覆の上面よりめ仕て掛し結
結ふるすに付て二筋さげ結の中ゆ上の色
て先を一つ結下りし結のとゆ壺とこの写こすに付ゆ
結て筋ゆ結よりもすし下りし結い壺の口覆のたふ
さてうはすれもと結ゆしとくし掛易結ゆて掛和しとし
今し式正の時いゆ上く結と云事也

但九紙口結ゆ結ゆ紙の紙して切ゆ三ヶ月と云壺と結ゆ大
て文掛しとくゆ方と掛ゆ壺と結ゆ結と掛

百八十三 干床香爐置様

壺の蓋の蓋ゆ高所を壺の所ゆ置
中ゆ紙ゆ月ゆ日ゆ日ゆ入て結し押ゆい壺
して山紙ゆこてゆて塗ゆ紙ゆ一つ足の色ゆ大
筋と一筋ゆ結ゆ筋ゆ方ゆ月ゆ切ゆ切ゆ筋
と結ゆ方ゆ筋ゆ筋ゆ上ゆ切ゆ結ゆ
高ゆ高ゆ高ゆ高ゆ筋ゆ上ゆ切ゆ結ゆ弱ゆ高ゆ結ゆ
九ゆ足ゆ足ゆ切ゆ角ゆ足ゆ足の和ゆ切ゆ紙ゆ
長さ三ゆ足ゆ切ゆ横ゆ切ゆ足ゆ筋ゆ足ゆ筋ゆ足ゆ押ゆ
筋ゆ筋ゆ筋ゆ筋ゆ筋ゆ筋ゆ筋ゆ筋ゆ筋ゆ筋ゆ筋ゆ

大第三第四第五第六と亟

たとへはなし

百八十四 葉茶壺千二重上之上飾置事 附客決事

二重上之上飾壺亟

壺飾くはりくはりとは上段ハ

一ハ上段二重上之上壺

之上壺飾之時之上段ハ

之上壺飾時人のまへ立

ハ上段の後ハ壺を向へ

の壺地紙の色ハ用分ハ不

行灯之上の紙之上ハ

なり赤色の紙ハ高麗紙

時ハ高麗紙ハ

ひのきく一ハ

出くはり壺二重上之上

ひのきの方ハ壺飾

百八十五 朝會行燈夜咄短檠子細

火を出さぬ

火鉢短檠ハ

のきの方ハ

たるの方ハ

合壺の

行灯ハ

百八十六 木燈臺事

以要はなるべきのなるべきにはなるべし

百八十七 掛燈臺事

一年大月の付日なるしるを示す木の板をの行よをなすべし

百八十八 露地塗行燈事

内種をなすべきなれてわ作る

百八十九 夜會に花生與不生事

花は夜の色をあらはすべしとて花はなるべきの時花と共に生ずべし

百九十 茶入り茶碗中に入床軸服紫于棚紫飾事

初会茶立の時中立の付茶碗を仕立てめる色

会茶立の時初の時より付中立

付き中仕舞に水指をめる色を用ひる茶巾と

茶筅を用ひる付切をたのるに拭た

のるよりも疑とおるる疑のよう茶杓を用ひるめる色拭

よ拭しる茶碗に茶立り中めに茶へ入れ中めに茶

袋より出して茶入を出一茶杓をとるめる茶へ入を杓を

水湯と汲入る指のよう茶筅をる湯流してもる茶へ出

合立りたるるこの仕方めの事

百九十一 惣別夜會作法 茶会の茶は初炭の中しこの品春

於一人〻茶立のこを立る或は客こを呼を種をよめり

行炭要こ或いる炭をる迎よ出一礼して客のまも作る

炭不よ要こる客る炭を炭をる炭をるる二まるのを

湯石の上よ要る入れてよう仕炭をる地こる考こ入れ

事立茶炭炭乃付る炭出し炭火をおめ〻ねよ炭

と作るよる出一囲炉裏の仕炭はんの方炭のまもにそっ

足此方といふの帰り大き中の通ふ南して直に炭、直に炭
仕廻て掃きれの入る時まて掃除し引くし備へて置也手前
傍也とてうつ手前の時手掃の道具よりの方に引
詰めて出し座敷の小さな大方へよせて道具数入る時に手
掃を取一ツ足を風炉先の方へして返す座敷の形りよ拵方々
二ツ足とて中々拵し一間に道具茶立る様に心得の
座敷もていふり大さの方に向ふ通して付し薄茶の時
手掃除して置き炭取の側に入れて置
其也し

百九十二　道幸事

板に茶入茶碗を直し置き根に柄杓引切を直し組柄杓引切は
風炉先の方へ柄杓を引き水は座の板の端と勝手の
其中風炉先の方に寄せて柄杓の柄を地敷居より大目一寸ほど
出して置也板の下に水指を風炉先の方へよせて置
下座の方へよせて炭斗を置き風炉を引出して座る茶
立る時は道幸の口を明て直に水指を手前へ直し茶立
無別数方へ座を移し人数にして座に相伴る
けれとのうるむさとし其を入直す所あるゆへなり

百九十三　花繪事

墨蹟の後へいかの絵を置してはいかにも吉なるへし

百九十四　薄茶時貴人ヱ茶碗替事

濃茶立出し吾殿へ一れの様其茶碗水翻の先に直
後にて薄茶を碗に出しまた人へ薄茶立て出し其初え
濃茶立る茶碗にて相伴に出し其人の茶碗にて洗

物を入おけば香しき茶筅（茶中茶巾茶杓仕）て住
るものなり

百九十五　櫓子茶湯事

櫓子のなかへ入湯をあつし茶合れい中央卓のと
ばるなかへ出し湯をたて湯をかけ茶を櫓子
の内へ入れ中央へ茶入茶筅を出し櫓子の底中を別
てあるよ茶巾茶杓を出し櫓子の底を数出し
の所へ茶を立てるなり茶をこれ

百九十六　雪中事

白もくれも沙弟い者所を点ずる

百九十七　羽箒事

大物や　大物ハ　大物て候

百九十八　茶桶箱茶湯

無別茶桶箱いりものの物をとりて出なるぬや物を
上へ腰巻しばるおい茶碗を数の中へ入れるよ物
物引切をわ出し物を引切とめ茶碗もに数
を茶のかよ茶筅を茶のまにく物のおくあつ巻を
大の方へ茶筅をしかく〳〵巻おの方へ茶入を入れ出し茶
大の方茶筅の茶へ巻くを茶入の方へ茶筅の巻を
てしかのとく物へ上巻茶へ入れ袋ちしかし物を巻
合物の数の内へ茶碗を出し巻へ茶を立て茶碗
巻合茶を立てるめ巻筅茶巾にく納二茶巾の炭し
巻茶入を出し〳〵茶筅へ物へ入巻茶を立てるよ
巻をけ〳〵納の時物を物入へ上巻引切へ巻茶入

小柳よりはじめて蓋合ハ柳枝いうにつきてはあとのさしてはまた柳を通て小柳枝の節をとり中をはし変て引切と茶入をとをし柳枝の柳形をよ通西し引切いちの方に通落茶入を奥の方を通すう

百九十九 茶湯棚 杉 （もう柳 紙張たる 宗和たる）

蓋子 長板 皮筆門 中央皐 櫂子

小柳 當世柳 大柳や

二百 風爐品々

庚金炉 出炉 乳足

とかう

二百一 水覆品々 （地足ト云カ者） 種足 眉の形炉と云

骨吐 うつのさね 桑の皮甲 西瓜 紙張茶屋の

屋をなるを宗易好茶屋屋くしゝ出しゝとしあの三文字の

庚金なり

二百二 蓋置品々

木使蓋置 宗屋青炉蓋置 仰し蓋置

灰吹の蓋置 竹節の蓋置

二百三 天目品々

湯漏 能皮（タイ）蓋 建山 本天目

二百四 炭品々

黒炭白炭黒炭ハ一庫と云ふ白炭ハ一庫炭と云

又ハ沈四炭ふの字ハ出し変ハ沈四炭と云白炭

ハ河内出樹山と云ふ〳〵つくされ丸香能者と云寺

のちの乃市まで要用書の節とすべし

二百五　灰救品々

風炉書付と風炉のとやたて代かハ土器にて灰敷を拵へ灰を敷べし

二百六　出蜻蛉入蜻蛉事

紫茶壺を床へ飾る時のうち壺を上段床へ飾る時い茶入を出の不ハ壺合時茶入を入蜻蛉へ壺合うし下段床へ壺を飾たる時ハ茶入壺合うち茶入を茶碗へ袋へ入うし二ツ袋といへ時ハ上段床へ飾出蜻蛉や天目ハ入蜻蛉へ下段床の時い茶入い入蜻蛉茶碗へ袋へ入うし

二百七　風爐時透木事　厚三歩　長三寸　幅八釜次第也五分歟

其の風炉ハ炭を仕組りし為代ハ如くなれの答へ

今安宗侯ハ拭を見ハ板伺ハ栖用し

已上三方掛茶湯陽を通ハ

雑說

附す法　茶入茶壺の袋結ハ毎ハ結ハ毎ハ結風事

宗貞說

竹筒花入

竹の左ハ一尺を寸号の竹を上の天厚ハ七分ハ下ハ切り

き一寸六分入ハ七分ハ切ハ一尺一寸ハ紀竹を切れり

法ハ寸六分の切ハ竹の高ハ上の切高ハ下ハ切高

ハ九寸六分入を一尺ハ尺一二寸の竹ハ上の

ものを法切ハ高の寸法一寸を切ハ下の切ハ紀一寸ハ六分入ハ

九分上の切ハ紀ハ二分宛ハ切ハ寸のもの

中倘（くり）　師説ヨリテ古香悦説

表五枚の厚サ七分巾四分脇二寸二分変表五の厚サ七分巾一寸
八分ほどその立分九分内入分七分ほどの高サ二尺七寸
横二尺六寸但ほとの表五枚九枚ほど地きるのゝ表五の
上と内のゝ一尺六寸ほどの

中倘戸　同上

戸ゝ立分一寸二分の脇九分さんの入分九分厚サ七分
めてとの脇九分戸沈ハ尺六寸ほど表五枚とゝ紙ゝ
のこゝろかと二枚よりをもしんをのたゝさんの入分六分厚サ
四分ほどさんとさんの四一尺一寸九分宛

二重上戸　道句宅

戸ゝ立分九分入分表サ七分さんの入分七分厚サ六分

日板の脇七分巾四分ほどの紙板四寸但戸沈し

刀掛　宗恩

ゝのゝ脇八分四方長サ二尺八寸六分さん六寸四方にて
四本有さんとさんの四七寸六分にて表の指い四次第有て
ほもしさんの長サ九寸三分上下板の四七寸巾上の板サ二尺一
寸脇下の板と同巾裏分のゝ内一寸五分ゝ

重箱　道句宅

長サ六寸九分横六寸三分サ一寸八分是の高サ一分寸何十和ほど

口の板　佐々木文齋宅

板一寸三分高サ六寸九分和のゝ

食器　同上

板一七寸三分高サ三寸一分和ほどゝ

九盆 通盆し 東山殿御道具

指渡一七寸九分 高さ八分 和のうし

柄指酒器 山本道寿宅

指渡一二寸七分 高さ三寸 柄の長さ四寸二分 和ぬり

横木 休傳説

高さ二尺二寸 むかしハ竹にて有しを今ハ竹にて有中柱の方の竹と浄く竹の柱と中柱の方ハすりうす

棚之事 同上

横木よりおせをうく 汐し又三寸の柱にて柱の色よりうすき有

袋掛折釘 春波師説

横木より二寸六分上より折りうす

風炉先窓 御先代表御園

高さ地袋の上ゟ窓の上ゟ迄七寸

掛灯臺 春波師説

板の長さ七寸一分 口厚サ三分 板の上ハ本口廣さ二寸四方

板九下の本口廣さ二寸七分 上の角二分切 下の角一分切

板の下ゟ一寸六分並て一分ますのみん押ゟ上し板の上ハ

高サ本口ゟ七分垂て完有 完九上下指渡六分半 完の横

巾廣一四分 板の下ゟ六分垂て九ゟ有 ゟ和の面ハ

少窪し 蝶ゟの長さ二寸 ゟ四方 蝶ゟの板ゟ一寸一分

ゟ内六分の九ゟし 蝶ゟの本口七分垂て下角の面九分切し

九ゟの指渡二寸六分下九乃蝶ゟの長サたい板のゟ迄三寸

七分 蓋板九ゟ上の九ゟ乃長サ八分 蝶ゟの板厚サ二分

袋棚 宗恩宅 吉好すりし

高さ一尺八寸 但上下の板二板の巾にて内のうこゟ矢い九

八分橋子の高サ六寸六分但板の分のもて内のうち橋子の
戸板厚さ三分内下ゟ四寸垂て丸く有橋子の巾サ廿板大
二ツ折一分ゟ下の板大巾さ二尺六寸三分内脇一尺三寸六分上
の板巾さ横下板内ゟ上の板厚さ六分下のゝ厚サ六分
柱の高サ一尺一寸六分但板の分のもて内ゟ高さの板
厚サ四分ゟ柱板厚さ四分ゟ橋子の上の板四方戸の縁
ゟの板大厚ゟ分六分内ゟ切し板の小さ七分四方一分の
面ゟ上下の板三分宛垂て板立ル

木燈臺　古織流

臺の木代高さ二寸三分ゟ臺の上の廣サ四寸一分臺の上ゟ
長さ四寸四分臺の地すゑの廣サ四寸三分臺の地すゑの
長さ四寸八分ゟの切り紀高さ九分ゟ切り紀の廣サ一寸一分

切り紀の上ゟ廣サ三寸六分ゟ切り紀の下ゟ地すゑ代廣さ三寸
九分臺の上角ゟ面四方ゟ柱の左サ右にて七分四方
柱の表にて六分四方柱の長さ八寸六分面分ゟ蛭子の上指
宿し三寸八分蛭子の板高サ一寸三分巾六分ゟ本口ゟ
下の面一寸四分柱の角ゟ三分宛垂て面切し上の分代板厚
二寸九分

突上窓　北見宗花宅

竪一尺九寸横六寸六分障子ハ壁三本横六本伝ハ竹ちた
よ左サ作ハ宗甫

作庆　道悦傳

このてをいりかすゑ分くして茶の庆を休ゆるしまゞ合体加減
よろしくてとゝみこの日にてしかるべきの上ゆるしてよ

と申して御せはうちんな紙が減まりを有ゆしなのこぶ
原いあふく義家と洗てなまじ付こげ原一緒よ微塵
三緒之合入く伺様小入口切の時ふと志門を原原よ玉ハ
一版之事と為ふう
一説みちん原作様者の原を紙ゆうい伺様よ入て志門事
原而ふ為けも黄文な紙文有ゆし少伺を入てと古たをい伺ふ
東山殿同明名　信阿弥　相阿弥　慶阿弥
井戸茶碗　唐らうふき昭ふう
行　茶碗
掲栖枝玉様様にて豊にて　挽栖枝様様ふたうん
如別屋を玉付い生指を真よ分てうくと玉ゆし玉ふゆ
生へ了を上てふへ門て洗くに玉ゆしとんたへ

百首
ふを家分ゆうふの師玉ゆう
習ふを見て社ふるれを原ふの原玉ゆう
人門ゆうれふ生を玉ふうれ昭ふ紙それゆう
様を様人よゆうい習ふこれ後い上よのふふゆう
上ふにいすゆ宮月と切ふもと以三様人ふいなも
ふゆを原ふふみを玉ふする原張くされと風信いて原ふ
ふゆを伺ふふ生と心ふふよ張い頭一ゆうゆう
ふゆふふ義茶ふふを義れふ生ふ人いあゆう
清茶ふ原ふゆを様て一多ふ腹の心減し原を原ふる
清茶ふ原陽心減心ふゆ原ふ心ふ紙泡ふれ様ふ心ふ原ゆう
原ふ角に心ふの心減と笑ふい清茶ふいく立て紙志ふ

茶とにて い茶を之ふ仏ぶて茶碗のうへ〳〵張りのうか
中徒の壺ハ扶くよりをてうに茶ハ茶扶まろくに壺あるり
他ホうて い茶と入て扶茶扶うて茶碗のかちをうとぬあし
東ようは壺ハ上りの茶扶うよりよ壺あるうし
房茶入府徒彫あるのうは以遅之〳〵たるあの
東にく徒茶と之ハ用とてと壺まう時よ帛にてぶけ
肩御い中徒とみ用うる屋よゆいとは至ぬあるう
文琳や茶子左壺東にさ之ゆしう茶扶いのやまう
大西をあいとう時ハ大指とかくりハ茶うれきく
ふめさ〳〵ふ茶中ハ紀ハ湯をおこ伊ふて徒とれきく
ふ春一まきの紙と載てのむいみなれ湯そかし
炭亜よ習中にかくうて湯のたまうさる炭ハけし炭

炭亜よ紙習にそもくうも湯の紙たまるすみハ炭すう
ふよ必炭すうなうハ用とそいろのかとうりはるる
くはもしう白炭あるハ扶て亜ふ茶の炭と亜あるう
ふにか紙炉のその白みるすうハ戻くはをうん氣ををセよ
茶紙をかくう時ふハ啄ふを結よのう方〳〵方ハ引茶
徒のあををう時ふハ啄ふを戸ふのう方〳〵引て社吹
徒ふ〳〵ふ左右むき高向ふのう茶ふ茶ふにさう
ふ一き答いうう徒ふ六七ふ言くふ茶ふハなふのうれ吹
焼ハにいうう徒ふ六七ふさけて ふうハ茶うれ吹
梅ハにハ紙ハ茶よすてよ〳〵されと ふうう〳〵ふれてよ
ふ〳〵の答よりうての名ハ毎し答の世左ふうれをうれ吹
至合ふを生てみうんよ〳〵徒の徒用至用よあ茶

中指大自然に茶入茶巾を亟斗の金

もこひるを小指おりも指を二つに割て去中よりあけ
茶入又茶巾の金を知らし給へ右の日面よ
余は宇（もを）ゆくもの周りをさい　やうなるうち
汐紙は源の方はすよりいでんに入みまそはしれかも
壺なりを庫より傾しんについ花よりいんかさるおうす
夜ふるおかすを答よ水はすと一多よりいんいのやまう
夜茶を湯のたさうをは蓋志めて今と張しくのいんへな
ふ指をいふは横にて亟をすーおのかさんをくまおよ
汐瓶をはふは豆よ亟蓋うい汲方うて拭へかさねよ
小板ゆて茶を立んは茶巾を小板のうに亟おそう
茶杓をこはしのゆうをたくくうて亟て下くおそう
をおの行ずはは大指ふう九ふて井汐ーれうう

中央よりやうしこーさすを附い原たーたは多たうう
咲達い汐こうよ杓二つ合ておうう向をこれ咲
茶をふていふをこて呑ふと思ふなよひーにてふをを洗せ
湯を汲は柄杓よんは月の指方面紙は杓よんはてうあ
柄杓ゆて湯ゆあをを汲は時は汲と思ーおしおを
茶よ入れ今茶を絞亟は和の茶中茶碗ぐおしな
和碗有おのおをみふは時を功をよけふひをを用よ
青金や濯ふは茶碗亟はたおたは此味ーてあ茶
名おの茶碗出ふう茶湯ふはおんを出ふを呑
胡金に柄杓屋の内は行紙を東金ふはみ結茶を
紙はよ池ををいは無く使まよあうさるんをとを
三は一はよ洗を湯ふの二の方紙をは洗よ咲い湯

いかにしていと高きをとのみ尽て
夏なれば氷を細かに金槌にて
砕きて小さき鍋の内へ入れ
古人の名歌の事
蓮葉を三つ四つ折りて二つ
三つ重ねて
茶碗をいかにも清らかに拭
帛紙は九寸一尺四方
薄板に書き一尺三寸四方
薄板に家のまちまち板七日
うす板に家の大小文字
もし入の杉折は又地蔵
茶入は大小にかかわらず
竹折は皮目を上へ
三つ折は中の折り目
三幅の絹を
を物とくくる時ふい
絹は布にて
蓮葉の三つ四つ
蓮葉の三つ四つ
家は又薄板に
何時にもとなり見まる

もせ[illegible]をきらすみそ花の[illegible]合和て生るなし
そもものえんの切々と知[illegible]い志毛二り合[illegible]よ志[illegible]
志せいあひとさくまな[illegible]生て[illegible]
仙口のむせすは[illegible]
四月末大日よむらひ堂たり[illegible]
こ一記答柄杓八中へ入すれ[illegible]
御口とも切り[illegible]
家逸よ公徒のよをこすけ[illegible]
世乃よ帝ちをれとよ只[illegible]
柄杓とも八つまセつふ[illegible]
高たう第硫のふちを第[illegible]
一よ[illegible]

下ものとえて人をえこうもて人いとよ年絶て好の狂い志[illegible]
功[illegible]めて切[illegible]
用よえてと耳よふれ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

太百前徒物する[illegible]
[illegible]
人よお遠[illegible]
[illegible]

慶長三戊戌年十月廿日　宗益

寸法品々

一天目　指渡一寸二分

一薄板　長一尺三寸横一尺
但矢筈の厚板八一尺四寸横九寸六分

一大板　九寸六分四方

一小板　八寸六分四方

一菜柄火筯　九寸六分

一臺　ウルシタイ氏　指渡六寸六分ニ五寸
七ワ臺

一帳臺　指渡六寸二分
ニ五寸二分　十者

一梅津臺　南蛮の臺形
ちがはなを作る
二十三才太合ヲ三十年の枝臺
上云

一香爐　霧島ヲよりて和ちみ
石ちよ指ハ上の山ヲ

御物
不破
千宗室　拙筆作者而指
上ノ山　山本屋井而指
ハ方和ちみ屋土焼指ハ不安

一柄杓建　七寸或ハ七寸六分

一長盆　中ノ深一尺一寸横六寸七分
四方の深の高一寸七分縁ハ一
矢筈也

一四方盆　七寸四方あり
七寸六寸のもあり

一圓盆　指渡一尺

一圓盆　三尺三寸

一羽箒　柄の長七月三寸六分程ノ物の
長十月但物の大ニハ十二月
下ハ十二月にて柄ハ何時も七月

一帛物　三尺ニ九寸
茶山流ハたけ八寸
幅一尺四分　但縫ヒ

一茶巾　布幅廣サ五月ヨあて〻紙ハ
布ヒ〻五月十六月あるは
茶巾の〻布ヒ二月ヨ縫ヒて布幅の紙ヒ
かよたけヒ一月半く縫ヒ方ヒ圓の茶巾とい
ヒ〻紙茶巾と云ヒ布ヒ〻袋ヒたもの二月半く縫ヒる
縫ハい手縫ヨあ方ヒ物ノ方ヒ〻ヨ縫ヒ

石流ハ
仮紙ハ寺沢志摩守流竪一尺二分
横九寸六分縫ヒ
地ハうろんし

一 手巾 布をもつて之を彫なしてこれを
一分のもとこれをたを之を絞る

一 彫物香合 板厚一寸八分

一 數之香合 二板有伺し上塗をなを貝にて小敷を拵なして此こに東山殿
時代の成るを之を伊勢物語の板厚一寸九分高さ八分余にて八脚造と
ひしと押写せる貝にて入て蓋上を布袋の家にて

一 長板 二尺八寸幅一尺三寸六分
厚八分四方の端ハすんと切

一 透木 釜よりへ
東山殿御所にて出さ寸幅
六分厚三分之を板の板目を上に成をて左寸法

一 二重棚之釣木 六分寸
片〻作ハ左四寸寸作る節をつこめて上物 下の棚一尺三分幅八寸厚さ
四分寸 上の棚下棚ともに寸七分書し厚四分幅下棚ハ四分厚

一 臺子向半屏風 高二尺六寸脇ハ高さけ 但ハ高
布をもつて七色紙をのハけハ七寸

一 茶巾 前ハ表方の形を一寸し後ハ
左右ともに角代指後し

一 風爐先屏風 高一尺四寸三分幅二尺六寸中ハ高
厚二寸中厚ハ

一 障子引手 四方ハ下ハ七つ目組ものの方ハ六目尾行ハ下ハ六目組ものの方
六目但ハ横十六本上下の中ハ太く堅八本ハ本組の中ハ太く

一 中仙 横二尺六寸 竪二尺七寸 四のくし

一 圍炉裏之寸 高一尺六寸 板の厚さ四寸九寸四方
二方ハ七幅六目のくし七幅
の厚さ板きをを一寸三分ハ中の厚一寸
三分板の角三分板の高さ二寸四分六分ハ七
幅の中へ入し

一 圍爐立德 高さ寸脇の長さ
ハ寸七分八厘の長さ
一寸七分

一 風爐立德 高さ寸脇の指渡
七寸三分八厘の長さ
一寸三分

一 枕下駄 長さ七寸三分横三寸
高さ一寸三分を足の穴七分四方小さく作る板の長さ
二寸三分裏の切り歯ハ三分ハ一分分鼻の本ハ前仰指

一 哨柱横木之高 二尺二寸九分

一若狹盆

德上壽中三星下